Parsec による簡易インタプリタの実装と構文設計 (最終発表)

機械科学·航空宇宙学科 3 年 1w192224 田久健人 August 4, 2021

はじめに

中間発表の続きです...

今回は、パーサではなく評価寄りの話です

進捗→https://github.com/tkyawa/project_research_a

abstract

Haskell のパーサコンビネータの Parsec を用いた簡易なインタプリタの実装を通して、パーサコンビネータの雰囲気を学び、実際に構文の設計を行う.

目次

- 関数実装に向けた下準備
 - ・おさらい
 - Return 文の実装
- ② 関数の実装
 - 関数型の検討案①
- ③ 再帰呼び出し実装の検討
 - 再帰呼び出し実装における問題点
 - 案②: スタックベースの環境
 - スタックベースのスコープの挙動
- 4 スコープの挙動についての問題点と修正
- 5 おまけ
- 6 感想、その他

これから拡張していく文法

```
\mathsf{AST} \rightarrow
data Statement = Seq [Statement]
           | If Expr Statement Statement
           | While Expr Statement
           | Assign String Expr
             Skip
data Expr = Var String
             Integer Integer
            Bool Bool
             (Op) Expr Expr
```

これから拡張していく文法

(実際の構文 →)

これから拡張していく文法

関数実装に必要なもの

```
関数の構文 →
AST:
   data Expr = ...
             | Func String Statement
(実際の構文:)
   Func :== func(arg){body}
```

関数は式だが中身が文 → 値 (式) を返す文が必要

Return 文の実装

```
文を, (形式上は) 値を返すようにする (evalStatement の型を統一)
→Null 型の実装を考える
```

return 以外の文は、Null を返すようにする

Return による jump 機能の実装①

一般的な Return 文・・・jump の機能がある

```
例:C 言語の場合
int hoge()
{
   int temp = 1;
   return temp;
   temp = 2;
}
hoge()を呼ぶと、1が返ってくる→returnで文の評価が終了して
いる
```

(補足)Return による jump 以外での同等の表現

Rust:

body の最後に式を書くことを許し、それが関数の返り値となる return で処理を中断して値返すことも可能 (jump)

OCaml(関数型言語一般):

そもそも全部 Expr

必ずしも return による jump 機能は必須ではない 今回は,命令型としてのシンプルさを求めているため return による jump を導入

Return による jump 機能の実装②

値を返すのは return だけ \rightarrow Null の場合と値が得られた場合でパターンマッチ

→Maybe モナドの恩恵が受けられそう!

Segence の表現:

Return による jump 機能の実装③

```
evalStatement env (Seq []) = return Nothing

evalStatement env (Seq (h:t))
  = do
    car <- evalStatement env h
    maybe(evalStatement env (Seq t))(return . Just)car</pre>
```

Nothing で評価続行, Just で評価停止 (→ なんか逆...)

Return 文の実装

デモ

```
>> x := 1; return x; x := 10
1
>> return x
1
```

Return 文の実装

まとめ

return 文の実装により、関数の返り値の指定が可能になった

AST

構文的には, 関数の宣言, 関数適用が必要

今回は、どちらも Expr に組み込む

実際の構文

```
Func:
    func_name :== func(arg){body}
Apply:
    var :== func_name(param)
```

Parser

Func の Parser・・・愚直に実装できる Apply の Parser・・・愚直に実装すると...

→予約語等で縛っていないため失敗条件 (?) が緩い, 優先度の高い位置に置くと失敗せずに無限ループに

演算子として見る,優先度高め →builldExpressionParser に組み 込む

parseApply

```
専用の演算子,予約語を使わすに実装したい
parseExpr = buildExpressionParser
      [[postfix (parens parseExpr) Apply]
      ,[binary "^" Pow AssocRight]
      exprTerm
 where
   postfix args fun = Postfix (flip fun <$> args)
```

→ (引数)を後置演算子として使用する(微妙?)

Funcの評価

関数型のようなものを用意し、関数型を返す

イメージ:

evalExpr env (Func arg body) = return (関数型の値)

関数型の実装案①

```
案 1:
```

Closure 内の Env の入れ子でスコープを表現する

案①による Apply の評価①

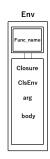
バラして,入れて,中身を評価 手順:

- (1) func_name を評価 → 関数なら Closure が返ってくる
- (2) もしClosure closureEnv arg body が返ってきたら...
 - (i)ClosureEnv に (arg param)をdefineVar
 - (ii)evalStatement closureEnv body

案①による Apply の評価②

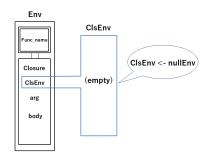
関数定義, 関数適用の際の環境の動き①

1. funcの宣言 func_name := func(arg){body}

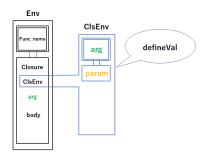


関数定義, 関数適用の際の環境の動き②

1. funcの宣言 func_name := func(arg){body}

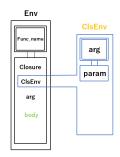


2. Apply func_name(param)



関数定義, 関数適用の際の環境の動き③

3. evalStatement ClsEnv body



案①の問題点

- 関数内から外側のスコープには一切アクセスできない
- スコープが関数宣言時に確定している

まとめ

環境を入れ子構造にすることにより関数実行時のスコープを表現 したが、閉じた関数しか表現できないという問題点がある

再帰呼び出しの構文

```
(すごい雑に表すと)
```

hoge := $func(x)\{x := x + 1; return hoge(x)\}$

現状の問題点

環境問題 (案①だとガチガチすぎ)

スコープを取る動作を、関数宣言時ではなく関数適用時にする必 要がある

(補足)未定義関数のApplyについて

評価の順番を考えると納得 func 宣言時, body は評価していない

環境問題解決の方針

スコープを、ただの連想リストの入れ子で表現していた

→スタックっぽくする

環境問題の解決

内側に新しい空の環境を取っていた

→ もとの環境を参照する形にする.

evalExpr env (Func arg body) = return (Closure env arg body)

(Closure の中身は案①のまま)

これにより、関数が開けた

案②: スタックベースの環境

案②: 環境をスタック化する

新たな Env の定義:

type Env = IORef [Map String (IORef TypeEnv)]

Env を,Map の List で定義 List をスタックとして扱う

スタックにまつわるヘルパー関数:push

push は、List の先頭に新たな要素を追加

```
push :: Env -> String -> TypeEnv -> IO Env
push env var val = do
   valRef <- newIORef val
   cons <- readIORef env
   newIORef (Data.Map.fromList [(var, valRef)]:cons)</pre>
```

スタックにまつわるヘルパー関数:pop

pop は、List の car を破棄

その他のヘルパー関数の変更

スタック (List) の頭から順に捜査していく

例:getVal の場合

```
getVal :: Env -> String -> IO TypeEnv
getVal envRef var = do
  envStack <- readIORef envRef
  case envStack of
    (h:t) -> do
    cdr <- newIORef t
    maybe (getVal cdr var) readIORef (lookup var h)
  [] -> return Null
```

データ捜査は List としての性質を用いる

スタックを使用した関数適用の挙動

手順:

- (1) func name を評価→関数なら Closure が返ってくる
- (2) もしClosure closureEnv arg body が返ってきたら...
 - (i) ClosureEnv に、(arg param)を組み込んだ 新たな実行コンテキストを push
 - (ii) evalStatement newEnv body
 - (iii) 使い終わった実行コンテキストは pop

案②による Apply の評価

```
evalExpr env (Apply functame param) = do
    func <- evalExpr env funcname
    case func of
        Closure closureEnv arg body -> do
            value <- evalExpr env param
(i)
            newenv <- push closureEnv arg value
(ii)
            result <- evalStatement newenv body
(iii)
            garbage <- pop newenv
            maybe (return Null) return result
            -> error "Error in func"
```

スコープの挙動はスタックベース

$$(>> a := 100)$$

>> hoge :=
$$func(x){a := 5; return a}$$

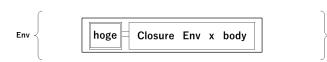
a が定義される場所によるスコープの挙動の差

両ケースに共通する動作

- (i) 引数の (識別子, 値) を, 実行コンテキストをとって push
- (iii) 使い終わった実行コンテキストを pop
- → (ii) の evalStatement だけが異なる、特に defineVal

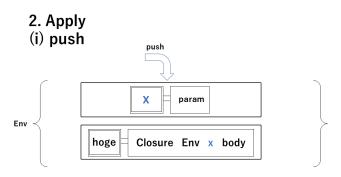
https://github.com/tkyawa/project_research_a/blob/master/rec/Env.hs

1. funcの宣言



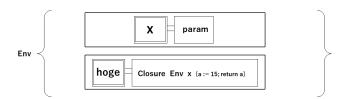
スタックベースのスコープの挙動

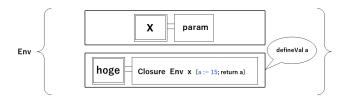
スコープの挙動① local 変数の場合

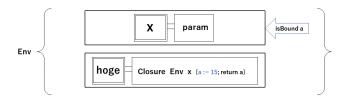


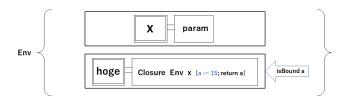
スタックベースのスコープの挙動

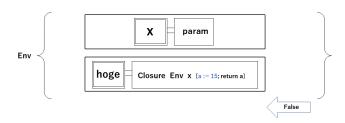
スコープの挙動① local 変数の場合

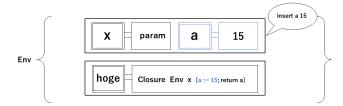


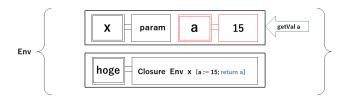


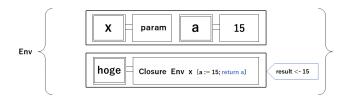




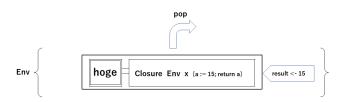








2. Apply (iii) pop



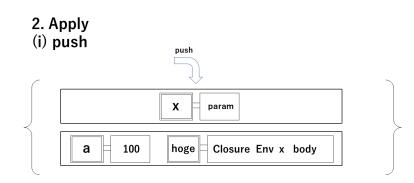
スコープの挙動② global 変数の場合

1. funcの宣言

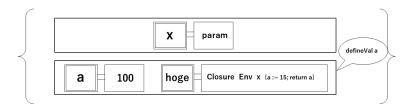


スタックベースのスコープの挙動

スコープの挙動② global 変数の場合

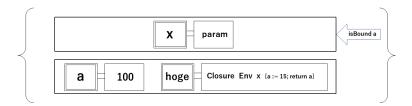


スコープの挙動② global 変数の場合

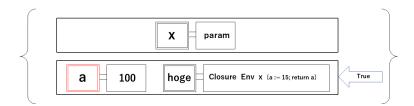


スタックベースのスコープの挙動

スコープの挙動② global 変数の場合

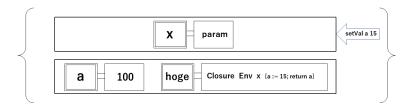


スコープの挙動② global 変数の場合

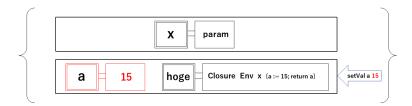


スタックベースのスコープの挙動

スコープの挙動② global 変数の場合



スコープの挙動② global 変数の場合



まとめ

環境をスタックで実装したことにより,スコープの表現と柔軟性 が両立し、再帰呼び出しが行えるようになった

スコープの挙動の問題点

```
>> a := 100
>> hoge := func(x){return a}
>> huga := func(a){a := 5; return hoge(1)}
>> return huga(1)
```

スコープが動的なら、hoge によって a にアクセスすると、huga 上のスコープにある (a,5) を参照するが、実際には 100 が返ってきた

→ huga 上の hoge の適用に使われた環境には, (a,5) の情報がない

静的スコープと動的スコープ

静的スコープ: 関数の宣言場所によってスコープが決定する

動的スコープ : 関数の呼び出し位置によってスコープが決定する

本言語における各スコープの実装

静的スコープ: スコープを関数定義の時点で決定

関数宣言の評価では関数型の値を返すため、関数型内に呼び出された際の環境の情報を組み込む

→ Closure Env (arg) (body) のような関数型の構成が, 静的スコープの要素になっている

動的スコープ: スコープを関数適用の時点で決定

関数適用の評価では、関数内の body の評価に、もとの環境をスタックとして考え、別の階層の環境を用意して行った (これは動作確認済み)

スコープの観点から見た, 問題の原因

動的スコープのように環境をスタック状に扱っているのにもかか わらず、内部の関数型では宣言時の環境の情報が入っていて、関 数適用時にもその環境に対してスタック操作をしていた

完全な動的スコープへの修正①

```
関数型から, 宣言時の環境の情報を削除
```

evalExpr env (Func arg body) = return (Closure arg body)

完全な動的スコープへの修正②

関数適用の評価について,対象を評価時の環境にする

```
evalExpr env (Apply funcname param) = do
   func <- evalExpr env funcname
   case func of
        Closure arg body -> do
        value <- evalExpr env param
        newenv <- push env arg value
        result <- evalStatement newenv body
        garbage <- pop newenv
        maybe (return Null) return result
        -> error "Error in func"
```

newenv の対象を env に変更

まとめ

静的スコープと動的スコープの要素が混じっていたのを分離し, 完全な動的スコープとした

更なる拡張を考える

- 多引数の関数
- 文法の整理
- List の実装
- アクセス修飾子の実装

多引数の関数

カリー化で実現可能

例:add

add := func(x){return func(y){return x + y}}

実際に構文に組み込む際は、これのシュガーとして実装

文法の整理

二項演算等をプリミティブな関数として用意すれば、Expr に無理に組み込む必要がなくなる? もしくは zero、succ のみ用意して組んでいく?

List の実装

List 型, cons 演算子等をプリミティブに用意すれば, 再帰呼び出しが可能なので List 内の要素へのアクセスも可能

アクセス修飾子の実装

グローバルなスコープがスタックの底だとわかっているから, それを元に実装可能?

まとめ, 感想

実装を通して、言語設計における悩みどころが体感できた

- 何を式,何を文とするか
- 各シンボルの導入, 構文的な役割 (; や等)
- 関数実装周りのあれこれ(構文的な位置付け, return, 環境, etc...)
- スコープの取り方(動的スコープ,静的スコープ)

プログラム言語における"当たり前"が実装を通してより身近なものになった

参考文献

- [1] Thorsten Ball, 設樂 洋爾, Go 言語でつくるインタプリタ, オラ イリージャパン 2018 年
- [2] Daniel P.Friedman, Matthias Felleisen, 元吉 文男, 横山 晶 一,Scheme 手習い, オーム社, 2010 年
- [3] https://en.wikibooks.org/wiki/Write_Yourself_a_ Scheme_in_48_Hours

最終アクセス:2021年8月1日